落柿舎去来遺稿

特別
へ5
1110
1

特
門 利へ
歸 1110
巻 1

落柿舍玄来遺稿

京都帝國大學圖書之印

予初学の時より俳諧之法を知る事を
強勝くせにはなはだへよ去嘆今数年を
ふるへくに及ずしてをのをのこれいま
及ばれ然れども此篇ハ先師の物語者
こと云へくに部門を分ち先師評篇門
門評篇後の教篇僅に発句を志るしの

故實篇

卯七回先師ハ俳諧の法式を用ひ給ふや
玄来曰是を用ひなつて法ハ
攝有時ハ古式を破る法ふことをいひきれと
私ハ破ることハ稀なり連歌先師
俳諧ハ長頭丸ハ後の俳諧を以て法式
唯代々の俳諧伝ハもとつき法ハ

凡俳諧の附句をよそよ久しとハ
連歌とあるハ七五七を本としていること
法式なり俗ハ連歌の式を俗用ハ
らる事て俳諧の法式を法るまも
及ハ又上ハ定まる法式ハ
若を人ハハ是を損益ハることを無
あるる事ハ時の宜一迎達を皆元

連歌なる由〳〵連歌の法式を備へ用ひらる
なり近て思ふに先師若年時よりいまさい
連歌よりこれ俳諧式を別よりこれ
世人を俳諧と云連歌の奴僕のごとく
あつかふ先師の説法を格別なり
如七回蓬門よりこれ留の服字留れ
事三を用ひる事いうよ去来曰蕉翁

服い字のよりなり是をつゝ思ふを連歌と
いふ一句〳〵ゝ切を長〳〵ゝ法ゝ祝ふ為
字の下の句ゝ字留とゝ事なし文字留
と定ゝ連歌の法なり古れゝ連歌
の法ゝ定ゝ字の下の句の句とむし
の俳諧の格なり昔の句ゝ
寺山のいちこさか〳〵くゝゝ

多くもつたてるやしろかいなせる

又

まりの門ながれ渡をとりり

そらてまて留の紙れ蓬の匂あり中三

の同

卯七回無季の句無作者玄来曰

無季の句を作るべ作り難いまと

実に先師の口授句を四季のごとくあるべき

無名名所離別は二季あれ句作るものの

ありさまをいうあるべき方て四季のごと

とかなめらをもつて二季を兼さるべい

ものとしてとし作るとあり玄来曰

無季をいうは二つ有一つを第後表裏季

としてある句を所なり作るのを無こ

寄行方々枝つき蛸を煮る　芭蕉

何とかく宗匠風を表す　杉門

又頃よ李白といへる一句よ李

白とうたき而ありて或ハ歳旦ことと

石月ともうたるあり

年々や猿よ笑ひ猿の面　芭蕉

春の代よ蛙ハ猿の福助　許六

かくはかりかくはかりかり

卯七問發句ハ切字の入ル事ハいかゝ

玄来曰いかゝ俳諧ハ只自然を先

諸人伝ふ先師曰いかゝよ玄来曰なぜか

發句ハ二句の末の字ハ小なりといへとも

指根ハ隠句ハ枝の大なりと

いへとも全かゝ指根ハ句ハ切字の

有年よりこれ農句の作あり先師曰
志ありさまのことを主とし面影を詠りある
ありさまを俳諧とし切字の事は連
俳ことを深く秘す程よく人よかるべきかた
とあり切字して先師より教る事多くして
いへとも秘を通じていはるゝ先のそれい
たつたつ伝授通い切字を

入るゝ句を切字切字ある句を字を以
て切字及ばいまる句は切字を切字
さる作者のたゆる先達の切字の程を宮く
らる此定ものとなる時を十は七八をかのつ
うゝ切るあり殆ん二三い入るとも切字ある句有
又入るとても切る句あり此程は或いは此
間のやはいかゝ色吉のしあて切字或い

ふるの三段切をいかに切るべきと一々名目をとして
作えあらはしたり又大卦同先師曰教か
三十一字のうちに切義八十七字よりて切る
大卦悔入て又同先師曰切字より用る時
は四十七字皆切字なり用ひさる時は
一字も切字なしと雖ども切字を
初まりて陰の一章を教へ給ふなり

玄来曰此事を記せし同門を探り考へしに人
をはらん愚意に推測なり此事強勝先師
の秘しし給き事なりと聞くに只先師傳
授の所かくの有しゆへ有る迄しるす
秘せしなり
記して人を推せしもとゝひ給ふなり
卯七月花ノ宮庵にて玄来曰花ノ

義を定め座あり義の句を互に大切なる
所つゝ合作なる故十二三句とも出る十四
句を雜句とす十三句目おの作かゝる義の
座とする作なる為なり前流あを付説と
用る和七日引上て作をるいはゆる去来
日上るよ二品なり一ツハ座を賞翫をおこさ
人なりてこと人あ義をとゝ思ふ時そを句

前あいてり前句をうけて本あを出して
義を定むあり是を脇出義といふ
又一ツ是一座の貴人地者あるを絶よ也
用る為を人を称ふ称ふ雜句等時
脇出をあたる義を作す又あ吟の時
互に二ツ定の句主あれか論退よ及
ぶ作句面をも引上て作すあり是

[illegible]花と[illegible]花と[illegible]と人の過ち
あるして花立の器[illegible]
自[illegible]ゆへとかく
事ハ清心の今世式なり常の稽古ゆえ
[illegible]人明[illegible]花
[illegible]人の自[illegible]
時和合と前[illegible]

[illegible]枝[illegible]義[illegible]花を[illegible]
いう[illegible]来曰け[illegible]花を[illegible]
先師曰[illegible]来曰元花を[illegible]
[illegible]一通り[illegible]事[illegible]
花幸茶の出花[illegible]花やう[illegible]
[illegible]花い[illegible]
[illegible]先師曰

きれいとよ古へいはくの四一本を拾ひ
洗ひいしの所を拾ひ拾ひ見も角を
作を屈〳〵さきと尋常のかへるを
を拾ひかるらんとあり
予案稿腹一さいの時よりり
と吟〳〵りれいかの句神仙ありと答
へ侍りし

卿也問蕉門の意を一句ありといふ玄来
曰予は事を何かる先師曰いはく〳〵意の
句数〳〵に和こと後二句ありと所の
を礼武法ありし一句ありて拾ふ大切の
意句ハ拾段ありしんいかと明り
一説ハ意を詩陽和合の句ハ一句ハ
を拾段可〳〵と皆大切ハ四ツ方也

洲崎いたる酒〜昔い意一句出れい相ひれ
俗言て意を志かあらき出ることあて
接拍せり又五平韻石韻といへと意
意句あけきい一巻といたしたあひ
かくこと有り大切あるあへ皆意ひあつを僅二句
二句一所あれい者と知て巻中意句
稀也又多きい志略て吟あとく一巻面集

あ有れり此句を意句出よりかく解
二句ゝ五句と有へ洲崎こうん時宜て
洲崎こと一句ゆとを接よといへをかく云
と何事巻面のよく意を度出よ
ゝしと思へあり軸の上をかく上
い出れのるあ似たることを連歌の
事ゆて俳諧の上ゆ肖き奉るゆとあた

然事しとと予古人の罷人をまぬかん
れ只後学の作しよりん事と思へ
作るのを
卯七回蘆門の宵園と月を用ひ作るを
玄来曰此事あり酒堂曰深川の舎の宵
雪の白中の月のれい外より月を作せんい
抽かる想しと也の月より用ひ叔裏
の月とえさんをいのしと月次の月を字
入らるしいりさと有和を事と思へ
を後風国の舎の宵雪の白中予曰先師
已の計を之作人とうんるの先師の宵
園と月を思のふい四のりての事 解り
然るを何の名をおく月の用るいのを
ましとあり此事を拙 恥のたひのを

許六をこと深川の舎に花也いふ人を書へし
野坡日東武の舎ゆ盃を釈教とせた
嵐雪兄と雅す先師日盃を釈教とい
ふ〳〵正月神祖ゆるかとゆりゆ日をく
いふ〳〵遠て思ふゆ此事いふ人ゆゆあ
らん一句ゆ釈教ゆ〳〵といふことを已ゆ
盃といふ〳〵釈教ゆらん中元とふ釈

ゆいゆ〳〵ふいと不審ゆり
玄来曰許六と名月の明の字と論す中
を中一八月十ゆ夜ハ婁宿と清明を
月ゆ中三和ゆゆと清明をよめと
中三詩ゆと新月の字ゆ中四ゆ
朝ゆ羽四八字ゆ叶ふをかり用事
ゆり富士と不二吉野と芳野と書ゆ

て〳〵十五夜達明の字書れある多し
明の字書て苦〳〵しかりしと云許六は明
月と八月十五夜とは和哥の題格別也
明月は良夜の月の事なり名月は
明の字書は来絶なりと〳〵論至
極せり〳〵明月の題を以て中秋
の月を仮せて傍題なるべし名月は

明の字書まほしきこと必せり
許六曰村雨を春なるべしと法ふ
也習ひ知り無野の訓なるべし村雨
の〳〵て春とも秋とも云ふ歌道
知る無ことの仮とれり玄来曰村雨
多くは夏秋初秋の半は謡作る人
雨風雨雷雨と用ゆと法ふと雨雷の

未変の初逆流なりしかども法会終るまで
いまだ法歌い尽し給せざる迫て思ふに
色々曲と書て笠元一対曲あるべきいと風情
よく家しかして何時と限るまじ家
なるもかくるなるやいと去来曰てゆえ
天下一まいのてゆえよりて誰を知るべきる
との也一家をたかへの思ひ心不通まと

俳諧なりてゆえといふ至りて天下の
知る人まで家一堂上めと市俳諧
なるを言い多くいまし也もとり
初て人の歌を出しかたと地下の
俳諧の一節なり紹巴貞徳と此俳諧
先師ゆえを俳と言ふ我輩の輩の
いふことなり

玄来曰古事古歌と云るは法のり許六向
ちる古歌と云る首中に當世の品々と
挙られたりそれ尚時の面々しい古事
古歌と云は是もあと備へ己り作
云と並べて云ふ事也今
の取よりは古事古歌と云て此作
云と並べる事也

玄来曰古事古歌と云は古る古歌と云
事也しかるに古事と云事也必云
云事也さて古事古歌を
取ゆへ古歌有云と云る
法有様〻法有ましと云ふと指前と指
付て作す事吾子の己り作云と
並べて云ふ事なり

並てのことゝ心得ゝ初心の輩ハ是し
誤もすくなゝ一首摺の事て作ることゝ
心得ゝる事一古並てといふことを悪し
といふ物ゝ有ハ是ハ物と成る
類なれハ物と成て面白なくいふ
名将の指図反ゝ扇ゝといふ句ハ
名将ハ作ゝて句全の長物なるしと

いふことハ世ゝ昔の取ものゝ有今ハ
高嶺の作り也古事古歌を一段物と
なる作ゝ方ハ輪ゝ廻ハかきと
ゝれのしといふ面白の奇をとりて
かさりハのまとい花の雪をせて
と先師の作ゝ中歌ハ同ゝ生物と変
ゝをかきとゝうきかさて着法ハ二ゝ

けてをいるものを書くんようのを書きのまゝ法めけふと一時摺と
て作りのこゝ有り老の字の力のり大
概かくのごとし
先師曰世上に能語の文章をこゝろ
或ハ漢文と入或ハ調素くたとへやく
いへ有し或ハ人情をいふことを今日

のさゝいれこゝまて探り求め西鶴
ゝ第も海しゝ乃れる有のり我流の
文章を性能字をとゝ文字をくゝ
漢語とかるとゝ有ゝゝかゝ山へ作り
事を鄙俗のよゝ有おふとゝ有り
ゝしゝいとゝるゝ
和書のゝ許六の

かさ作るに却て發句の光りを失ふ
如くなり前書等は文章ホ蕉門の名物
なる事

先師曰凡贊名所の發句を贊と
贊と文賞の違ひを書明石の發句を
杉山杉風に用ひ侍るべし云々

先師曰俳諧の名を強勝熟字あるべし
唯元禄さび調にて字形風流
なるを用ひ——俳興なるに書て
作るべし所詮片名付るべきを
字形に苦——かける事——
玄来曰芭蕉翁俳名書てのち自悔也
と申し又野明ハ名を風鉤と云ふを

鈔丹の有字よい石に用ひ置かれたる先師
の野明と云ふ設あらいり俳諧集のこと
ふ云々ヤ云り俳諧集の内にて俳句
後の〻師集の部之と云て先師
と云をれ法はさうの流儀等云集
書の部内の〻新古の内あ入れと
也四つ〻

玄来曰外題の寸法の厚い表紙の三
分の二を取接を五分の一を取やうん
後義の時先師いへ法はいる様に覚え
魯町問作様る曰云古来よりの事也
玄来曰ふ学語先師の句出て初て云る
古来の事多〻所事絶書稿あ〻
撰用句〻

先師日来の一つとさうし出たるんい
後世のために賜はりし始めの夜と古
書の事の言ふ〳〵とい〳〵と世間の人
芝居のやうなる丁南う自とさと作る
仰也同先師ゆえ人形といふ文芸作りし
いか〳〵去来日史邦芝とて写さるる間
先師の芸閲すなどを求めて作りて

忘却せり我おとり文臺と而特世に
後の人写し伝る人多〳〵去来日先
師の云俳諧の書い和漢詩文史録
物語等とも思へ俳書の名のる程
ともやされい先師の芸なるふをうつ
みか〳〵東三日月日記名の日記さし
猿蓑葛の松原笈の小文集諸を返

なり浪化集の冊初めと上下とありて海と
なづけ山と号して先師皆和歌の名なれ
ばらかし浪化集と能書の名付をも
詩和文と分け別なるべし玄来答さ
れば浪化詩人なるべし詩集あるべし
能諧者なれば狂歌なるべし能諧の書と
いふことなるべし

先師評

外人の評のごとくも先師の一言まもるべきものは此部に記也

蓬莱にさくらを伊勢に初伏　芭蕉

深川くりの文あさなゆ評なり汝いかに
なれば作者やと問ふ玄来曰都又は古の俊
ととのへて伊勢にしかるべしえり式の人
やうなるべし神代と思いて後世
くやらん道祖神のごとく胸中をさいく

行くを送り行れと中先師上野の
地の雲霧ふたがりて今日神のかくし
しれあるかと思ひ出て為鉄和尚の
詞ふたより初の一字を吟し清浄のうる
はしれと蓬莱ふ對して治ものもとと
幸深き行を花より朧ゆて　芭蕉
或人まて留の発句をんやと云其角答

曰まて六哉ふかすふ四ハ郡留の発句有
ふて留の兼三を婦ふ或ハいハ句切
迫れハゆてとハ作ると春り呂九日ふて
留の事ハ其角ふ解ハり又是ハ事三
の句也いふふ発句とハ家ハ作ハや去
来曰ハいハ呉感偶ふて発句なるる
ことを疑ふ三ハ句集ふ源る

ゑの句集をかりてこれをみるに
先師主人に曰其角玄来韓皆理屈あり
我いまだ花よりまつの臘にして面白かり
しのみなりし
行きとゞまるとしてこゝにはる芭蕉
先師曰尚白雅にして近江に丹波をゆく
まことに行年をとるこゝろとなりとい
ひ

洗いわ〳〵受けるやうに玄来曰尚白雅にして
らに湖水朦朧とこゝにまをおしむ
俗有和一法をいまの人のうゝ伝るとと
中に先師曰古人を此国にまを
愛ぶことゝ都にあるこゝに
玄来に一言をもて徹す行年近江に居住
いうてかゝ感のまゝまさん行去丹波に居

まさいえすりはうふまし風光の
人を感動せしむることと真なるかなと
先師曰沙弥を去ることあれば風雅をかたる
事きことのありと法師あれば法師
きしらん

什本戸や鎖のさしてあるの月　其角
襟を義撰の河内の月とあるかりあるの月

霜の月和歌作るよしの人の衆儀
あるの月あるる先師曰其角うあるこの霜よ
ぶくしあきあるあるとかくしてあるの月
あるを入集させしをしるるをしめ文字つ
まりて紫とあるあり紫とあるあり紫板の
後大津にて先師の文あ紫の戸あるの
に此本戸あるかりかるる秀逸を一句とする

なりたるとて出板かなふことをいなき故也
とあり凡非日常戸は此戸させる勝谷
あり玄来日此月と紫の戸は幸てこそ
色は尋常の氣色なり是と城門の字
しるとて色は主風情のわきまへ凄き
事なりあり宮ちかと色角うみを
ちあ故ひらもてとそうり所り

うらやまし思ひさしら附猫の恋　鈴人
先師伊賀ちり此句を勝て日心俗
情なるもの一たび口ずさみなし
かきう風雅見せ主りて情とあらい
せりと所りとうり先師鈴人篇言
かうるく人のもてとそ世に幾句多く志う
きとことあるあり初て情と

歌をもて世を治めしるし

たかくしも二日の月の吹ちるゝ　荷兮

風乃地ゆを蓼さぬ河ゐ成　玄来

玄来曰二日の月とも吹しぬちるゝと働くるいつ

つゝ弓ゝ月ゆをもるゝ腰をゝりと見えゐ先

師曰荷兮ゝ月を二日の月いふとのあて

付せつゝその名目を深あいさせるまあし

沖ゝ月を何をもて作ゝるゝもゝえた

金鈴ゆ好月ゆ月ゆ地まてと浪りゐる

をの子ゐいやゝゝて恵ゝゝゝゝゝる初風

の地をゝゝせゝゝゝゝ

ゝゝ風ゆ出ゝゝゝゆ雛のゐる蓑の衣　萩子

先師ゝ月を評ゝゝて伊賀人の作者ゐ

ゐる而と作ゝゝて むなつゝゝゝゝ

丈州日伊賀の何とかいふを先師に初めてその何とかいふ先師の何とかいふらんや

清滝や波に散るか芙蓉の月　芭蕉

先師難波の病床に吟じて曰はく

蘭奢待焚き尽くす夢の月に立てる塵

となしと作る句に似たれば清滝の句

と案じ合せ初の草稿野明方に有へし取て彼ら尾しと為り統定せ

ちや集めと出給ふに及ばず

若人の句に用ひ給ふ事なら

ざし

原しさに野山めぐりる金剛式　玄東

見ハ岩光寺業の清滝真如堂に遷座

玉
玉の吟之初の冠ひいてりとく
ゆり先師同かくらゆい金飛なとし
くはさることのあり文字をかいてよし
とて風薫と改めの後猿蓑猩猩
ゆえ再改て今は冠ゆえせさ勢に新
面撮やあのしのとあり郭公　荷兮
猿蓑撰の同玄来曰はゆえ先師の野を
猶ゆ為雲むゆよとに同あり入集をへた
先師曰明石の同るしいるとよし　玄来
曰乃先のおとをさは先は一句たく馬と
毒しうへ侍るのを句主のゆ為なし先師曰
句の御ゆ不ゆて一歩をとうこうたなゆ
をとりえゆ入をいりゆんとあり絶ゆへた
若うを紋帳い萌黄ゆ極り故　蕉人

先師曰發句は芦つくさのはの発句なり
らんは誠人発句既に成りとて面白き又
はなとみ出素なりて時句は帳に書なる極
なるべし月報朗句なりて句帳の
発句と称す色しことかつらぬ色を若
代はかりて歳旦とかしく作る心を
高の繁廉なりし海う句とも成れ
なりてさつかりしてそなる所を面白かりし
とあり

振舞や下座も直る去来雑

去来

此句を思ふ所なりて作を五文字古鳥
帽子紙衣あはれなりて京物を下心
徹せしあさましやとしやの新はを
うかしと今は冠と立て空新い

りあり先師曰五文字あらためて
おのれ信徳の人の世々あるべし十
分あるべきこと極難思はるべしと
ぬし

田代多りの夏侍衆の句箱式　百子
もとより先師の行正しかり凡兆の句時
猿蓑撰の時凡兆曰吟句えらぶ所あり深く

へ〜去来曰多り夏と侍衆の句皆岩り
園夜の京色風姿のごとしいふ凡兆曰
先師曰兆もし〜拾ひ我拾ひむ事
伊賀の連中の句は見あはせる有之を
重〜吟句しあるんとて終に百子の句と
あり〜〜

大年をおもふ人の年は敵られ　凡兆

元の五文字を立てて示す句也信德曰
立さつ〳〵と色色〳〵花を路人の見る事
切なり玄来曰句の意は古人の花を
愛して詠る歌に洗れし人と詠
山野に行遥ひとと云まる命のさてゆ
なれば桜と花とを都る年のかなさ成
こゝろ高ひさまを明りなむ信德想心に

寄る先師を語る先師曰とあらい信德ら
知る高ひ花のこゝろとなり三後凡兆大年を
し冠す先師曰誠に百千年の歌なり
いゝこと尽るものかなと大笑し
侍ひ入り

賽錢も用意新なり花の森　玄来

先師曰花の森といふ句を名付ものや古人

も無の花とたとへ中作の色詞を深入してかゝる
樹ゆきてとゝ云ふかゝるにはあらず

月雪や折たくき若草こゝろ思　鉢入

玄東曰此俳諧伊丹の名所一流ゆゑ志賀と雖
や鉢たゝきと云名有鉢入り名入集いかゝ
作るも先師曰月雪とゝ新の句一名御さ
ゝて云ふと風姿の句りたゝ志賀と雖や

ゝくゝ世るゝゝ指別さあるとゝ鉢敲の作者
ともて遠所のとゝ俗者とかゝり作ふい先
をゝ有和一又をて和をいかんとゝ
きゝ世ゝ世ゝ世ゝあるゝ姿ゝ中ゝ　其角

玄東曰其角ゝ宮所作者ゆて作る僧の発句
ゝゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ先師曰
ゝりかゝゝ定家の作ゝりさゝてとあき

事をとゝのへいひつゝ和佐ゝ守
え〻評判あるゆゑ似ゆゑ

をとゝ日ゝ花の山神川花盛　玄春

是ゝ猿蓑二三年前の吟なり先師曰此句
いまゝ人有まゝ一年を待へしとなり猿
杜国ゝ伝ゝ野行脚ゝ活ひ紀行
ゝりの文ゆ或ハゝ野を花の山といひ或ハ

ゆゑ〻ゝゝとゝゆゝ山ゆ云是を奪れ
又ゝ其角ゝ猿さゝめぬといひゝゆ乳色を
ゝゝ色てよゝ野ゆ奪句をなりさたゝお
ゝゝひゝゆの山神川ゝ思ゝ沙伝を
なりゝ後此句をかゝりゝ人をゝゆゝりゝ
いまゝ一年ゝゝゝゝゝふゝてゝ知ハ
ゝん二ゆハ知ゝ前ゆゝゝゝゝ事をゝ

病雁の夜さむに落て旅ね哉

海士の屋は小海老にまじるいとゞ哉

猿蓑撰の時此うち一句入集すべしとなり
凡兆曰病雁はさる事なれども小海老に雑る
いとゞは句のかけりことあたらしく誠に秀逸
なりといふ去来曰小海老の句はめづらしといへ
ども其物を案じぬる時は予か口にもといはん
病雁は格高く趣かすかにしていかでか爰を案
じつけんと論じ終に両句とも乞て
入集すその後先師曰病雁と小海老などゝ
同じごとくに論じけりと笑ひ給ひけり

岩鼻やこゝにもひとり月の客　去来

去来曰酒堂は此句を月の猿とすべしと申
侍れど予は客の字勝りなんと申先師

曰猿とい伝へて海此句といふ思ひて作せる
や玄来曰明月や山伏と吟ぜ侍るべ
岩頭亦一人の騒客とゝ存ずる中先
師曰是也と申す月の客と己と若宗いて
ゆゝしんそいくゝ其流ありあたく自
称の句と和と色し此句を称と珍重し
て及の小文に入るとあん予ら短句を

一号ゝ侍りけり先師の句をもとゝれい
かに狙者の感もいのゝや山及の小文集を
先師自撰の集ゆり名を付ていまゝ書と
又ゝ草稿半ばと選化まゝ侍る昔
河内ゝ予ら發句節句ら入集ゆ
ゝ侍るやと申知ふ先師曰御門人山及の小
文に入句三句物ゝ侍るこの事ゆゝん

洲さきのことをいふるとなり

うりくゐる茶の下ぶしをこの節　丈竹

先師雅波の病庵ゆ人〳〵ゆ義伽の句をそ

すゝめて曰今日より拙の紀後の句なり一字

の相談をかゝふ恥かゝにてありさまゝ

吟ことを多く作りしゆゑ只此句のみ丈竹

出来ありしのゝしまふかゝらゆいかゝらぬ

初作ゝゆ興を覚しゝ景をさゝらゆ書

いゝ句なんやと此句ゆて只人ゝ作る

下京や雪つむうの秋の西　凡兆

此句初ゆ冠なゝ先師をゝ見いろゝと

意作りて此冠ゆ極めゝ凡兆アト答て

いゝ義是先師曰兆沖をゝゆ此冠

と意、却〳〵若まさることのゝい我二たび

概略といふ事かくのごとくなり玄来曰此五
文字のよしあしは唯しるしを志り侍れば是
丹ぬりまとはいうて知り侍らんこの
ごとく他門の人伝授に服いるべいつれも
冠蓋相望——さよしかれかうあそまま
ありしかいたのしうあんと思ひ侍ること
ゝ　猶の霜よ沙弓や明の月　玄来

此句を伺ふ時先師志ゝゝ吟して色
角をのこまわれ予思ひ誤て先師曰へ
ゝを帰ることや奥引の言を知ぬるやや
と志ゝのよしを申侍れば先師曰
ゝ者もし沙弓を古人をよく知れば
ゝて明ぬとて山を迷ひ入る志ゝれ
ゝと吹送る萩の上風とよめりける

和歌優美うつくしきを形容して作り
ものを俳諧自由のうつくしみたる尋常の気
色を作せんを主とす物かたりの——
一句おもしろけれか皆業しぬきて
色角を捨てかるみを主とせり辰
号も此句を郭公なるかとしるる
後徳大寺の歌は同業也しかるに物

あるさまを初れを
蕉の葉の——
此句を蕉性の葉の谷風も一きち峯を
裏吹うつさ寒〳〵ふ句なるよし予
先師曰此句を詰るに先師曰殺句に新
のこと〳〵句〳〵まとしとくすことの如
らはしを支考かること大よ

仰とやらん志れかり
尾張の人は句なり

感歎し申て資自しいふあと和
侍るとて此比あ潟のりにり事を時も
笠家あ学せの〳〵りるゆや此事沿かも
あ〳〵うち志を侍るそいと市宮ありれ

下郎めつきうはきや糸掛

先師語上ゆて語沿此比甚角う集り
侍りありいうあ思つふて入集しにしと

云去年白糸掛の十あ山ゆ沿ゆ形宮よく
いく〳〵せるあ侍るとや先師曰
い八深て侍りあるゆ宮〳〵ゆあて
所あ深ゆる事侍りて資自あ茂
〳〵紀事と茂ま〳〵紀てことを知れて
ものとあ月中ゆ蓬りり臘月 去来
魚所あ別るゆ侍の白也先師曰侍白悪〳〵と
いふあいゆ〳〵沿切者ゆて侍〳〵いひまさの

うしゝゆゑ也玄来曰いうさゝゆゑまさしてあれ
事と自ようあてゝいのやはりゆゑあり志うえ
ゝといまゝとすらゆゑ解せぬこゝろ心中ゆゑ一句
仏色ゝと自ようあいのくいのをゝこゝ西いて
ゆゑ是い意到自不到也

泥亀や苗代水の睦うゝ　史邦
猿蓑撰ゆゑ誤つゝ睦はあひゝ人あり

先師曰睦うつゝとはあひ祇宮風流各
別なり猶ゆゑ睦うゝはりして睦峠あり
ゝとあゝ所あはれ乳母を誤るゝこと
事の罷のゝゆゑ自を哭の事はは
おはゝどうある故ありさいんあゝかり
りゝ

三つゝゝくに藤ゆい原ゝ紀夕式　宗次

さるこの撰の内今一首は入集と聞えて数
首吟じ来れと云和歌さ首なり一又先
師の信ゐ侍りしゐいさく注侍き遊家
も師なんとゐ自せらきりしゐ四ゆるし
山へ志ゝゝゝゝゝゐ者ゐ涼しゝ侍ると
ゆりしゐ先師日是こと幾首ゐあると
こ今の首ゐ侍りて入集せき遊りし

昊棚の奥なりしや親の歌　玄来

そゝゐ面歌のゐはゐゐゆゝし意祭と
いゝ首也此時祭時を神いまたゐゐと
やらむ昊棚の奥ゐ内ゝしゝ見へ
侍る中遊ゝ先師五十年ゐ昊祭記の
玄味ゐゐゝ此ゝゐ古ゐゐ侍中
和ゝい註ゐ昊棚奥ゐ内ゝしやと

作りを何とて句ゆゑ
なるべき下の五文字はいかゝあれば
ものとやはく新の句をもて句なる
べしとありこれ只一句を重ね句なる
べきに源心ひとへに初心おとく
詞を修し或は心たゞうゝあれいい
初心の輩の見て語を句を事なり

夕ぐれこゝ庵と氣れこして帰りけり　去来

予が初学の時分句は先師
曰蕉句を句作の能をたしなみ作を屋
しなり試は句を賦して窟にあ
又是ものを方弟ひしなるべ
作ることあるものたちや麦畠　游刀

元非曰是麦畠を麻畑と時みんの去来

曰麦麻よりもさきあるべきなるべし論語
す先師曰又曰あるべきなるべし論語
云用ありと制し給はるべきなるべし
いとうしや沖は河面の点帆行帆　玄来
玄来曰猿の義を新風は初めり時面い此集の
義曰あるべきあり此句仕をよめい作る唯有明や
片帆あるべきなるべし一河面といいいいとうしやく

つとも句はとりあへず心の深きをもとめ
ゝん点帆をこそとめこそとめん　先師曰
沖の河面といつを又一時しあてよしされと
句をほうにおとり作るを明り
先年は歌えあいやや時る　玄来
玄来曰五月廿八日芭蕉の互あ歌又合
りるべき歌をとりかへむし　菖

光源氏の時西の釣殿にて遊びしを
紫式部うたよみやとる遂をかりて仮
名先師曰当我ものもとしかの西の
一名いまるいにあらせ玉角う評と同
ありと源門より評し侍る評六昆
自八幡りて詞たるに玄来曰八幡り
て詞たるもといるんい輝りたる

いにあらせぬとと評を爲し史料曰
今は作者をさらしるかを出りぬきい
是あい合点の因あるへしと花山院
由門と弱日由むかし獨雲
玄来
花の咲を
先由を一風りと花んの宮と云ふ
りと仆侍る先師の教わらしかり

かゝさるれハ又第句と先て此句と消ぬ
先師曰いうゆ思ふて付ぬ　作者
予曰弱雲は長雨ゆゑ機嫌なりし
とゝて初め付侍ると侍るゆ
此翁雲のされゝ所なる此句なり
なゝ以ての外の詮なり
とおとゝひ消ぬ　侍るとゝ先師曰

やまり初の句なゝハ三十枝ある色し
狂沼ゝ所と表を色ゝとて今の
五文字ゆゑなりし
梅ゆすゝめの枝の百なり　玄来
是い歳旦の脇なり先師深川ゆて
開て曰ひ梅ハ二月のゝ乳ゝ実なり玄来いう
ゆゑ歳旦の脇ゆゑ用ゆる

ゆるしあらん

船のつゝきの西国の馬　　猿猴の句なり

詠ハあさゝ原を焼長とんゝる時此句ハ
長とかゝるべきなり先師曰いまハかゝるべ
らしき句い嫌ひ侍る是おいる所也
長ゝ引る句かゝれたるあり京とて京の
時此句ハ仏ゆゑ所也侍らや先師曰

船の中ゆゑ馬の行ふる所ゆゑ西国の
馬とまていふべきならんとのこと
なん

うら浪の角さしぬる月の雲　　去来

去来問曰此句と所ある角さや先師曰
所ある雲の角まうら浪の月といと称ハ
一句さきあえぬ

丁雅の撫子水に浮かれり　元雅

をしめいの業ゐ取り元雅向尿業の事も中

絶きう先師曰嬬ふ屋の中に

百姓しいしとと二句過程の句

ひの〳〵てとよかの〳〵む元雅水汲む

前句

ほんとぬるぬる池の蓮の実

以前のかさ出る椽のかふきて　芭蕉

此前句出る時去来曰かゝる前句をの手負か

らんとて教刻業しかれ皆〳〵芭

先師の附句の面白きかれ有て

附給ふ也

くろ〳〵と見る元櫻束の表

以前の小さ門を出入　芭蕉

此前句出る時去来曰前句全新櫻束の

家の事をいひそこなひたる句を游
る事むつかしかるべきし先師の游句
をたゞきいひ游てこそ世話人の
後の夜まくらつる日の新
ゆゑ〳〵と小さき事ゝもあれども　玄来
竹の匂ひ雪の上に中ゝ〳〵游のくるしさ
先師曰よれば上句の張りあるゆゑ
弔ふ事を中にして此句を游作りたる
歟春日上句の旅〳〵中にて言ひぬ句知れる
蕉門の花の俳諧格別也と感じ
二りゆつるれば雲の秋風　正秀
中連の中きりなく月新か　玄来
正秀亭にて三吟しゝ所作
新とまらるゝ月澄てと游作りたる

先師かくい斧正し給はりて夜ふけ
田羽年亭に宿に先師曰今歌初めて
正秀亭に会し孫宮あれば発句
を我為る事しかと為る人語して爾
き事はりそなえ句と元ひ俳
悪とあるいは述し生す為き事
也一夜の後発句しくうかる沙う発句

句時をうつさい今宵の舎むかしうむ
ばりの奥のいりあれば我発句と出
はる事しかとそなえ先師の発句を
もし正秀忽服を賜はこうかつと
そけしは雲は気しきあるとかく
の気やうある中三沙う事前句は気
あと探しは来は俳の事なりと絶

歌いとり侍りける　玄東四てを附ル八月
新ゐの新たつる山ゑえてと中百
作りけるとたく月の清夕よさやかき
所いとをのをなつてを作るし
ゆき先師日を句を出さい新てゝの
まゝ　まゝん此度の脇句の恥を一度
すゝかんとを思ふ事とあり

分別なしゝ無恥ゝかゝる　玄東
幾世生にあもゝ侍つゝ作る紙　芭蕉
先師京より郡坂方への文ゐ此句を書
此道の作者いまゝ此事味をとゝるれて
おもゝ侍ゝ程とを作ゝ先ふ型ゝ侍ゝ
京人の名いつゐれとり初ル脇　史邦
先師日中の七文ゝおゝよゝ松ゐれ有愛

白の長こゝろ〳〵高味さてゝあめ〳〵に

駒牽は市場やいつらん三りの月　玄来

今やひ〳〵らん市月の弱こゝろを明

うへて市場やあ〳〵ん二りの月こゝり先師

日は白を美月と合せるる白ちすと

いのさゝり落〳〵て

同門評

凡篇の異評自と是とにてるあ
例あるハ未別者あき故なり
尚後賢人と待作る

腫おゆ柳はさい新志あ八式　芭蕉

浪化集りさいる柳と書せり先い弔う誤作ふ

亀かさ稀て史邦ゝ小文庫ま柳のさいると

改ゆ支考曰さいる柳ありいうて改作や

玄来曰さいる柳考〳〵いう支考曰柳の宗

ひいきなれあり論ずるゆゑに比論せるとの也玄素曰
ゆゑに柳は垂よさいりあるべき論ずる柳しと
いへかあれよりあえ作るあかさ祇て弔う誤りを
なすす支考曰吾子の説いるとあり只論ずる柳と
ゆへ〳〵丈竹曰詞の作るさい六〳〵に論ずる支
考曰いるあ〳〵あ〳〵ん玄素曰流石に面白あ〳〵
を安作いさるい口惜しく比論よしてい誰々

もいらん玉よさいるといいてう及ふへき
指位と又者別ありと論て許六曰芝師の
雑ゑん論ず論る柳とあり芝柳のさるとい
首切きあり玄素曰の事い弔う字所異之今
論ず及いに芝師の文ず柳の論ると徒ず有
許六曰芝師あるとり垂〳〵ず自分し
真説を論し〳〵かとし〳〵とし三子皆し〳〵

さいろ柳の説あり後賢批判し給へ

玄来曰いろ〳〵ありしを有りし人箱此白い海よ海〳〵
ありしに人ゆゆしきもの〳〵しし府らう書送り
きふこと後大切の柳一本玄来曰事ゆ〳〵ありしとい
文考ゆと語りゆふこと後と猿蓑集は
陰れいるよ浪化集撰の半ゆ先師逝化ありしうい
此句ゆ〳〵海〳〵ん事と恨てを入集ゆいまれ
らせたる

雪ゆ日ゆ兎の皮乃袋つくろふ　芭蕉

魯町曰此句意いゆ〳〵玄来曰前ちよりゆとも

遊てとゆきいろ〳〵の業と思ひ〳〵一法を
理会すゆ思ひ〳〵に機器を蹈破〳〵て初歩〳〵
先師ゆ句を語りゆふ事感動す先師
日是を恨人をの趣人と海のゆ〳〵むと思人
〳〵ゆとゆとして為文の機略
ありし〳〵世人或云兎の皮乃袋作るハ雪中
の事をいろ〳〵ありゆといろ〳〵理屈を付て

ゑるゝをうるとゝいふ　新さい
暑さ日よ後つゝ蚊とゝやゝ　りの類
へゝいと涼まゝ

山路来て何を見ゆらん　草枕　芭蕉

潮春日莫い山よりまた芭蕉俳諧の切者
ありといへとも歌学なれの過あり玄来曰
山路よりすゝめる詠歌多ゝ

潮春い地下の歌道者いうて初い雅ゝいらを
りんいとおほりうかゝ

笠捨て墓をめぐるや初冬　北枝

先師の墓よ詣の句也許六日見い脱とり
いゝ句あり自何の疑ひ有てやとい　いらん
玄来曰やい治定嘆息のやゝ常よ人を節よ
よい笠と捨て門戸よりそいを見い思

の和よ墓とめくら事かるやしいくる事也
凡發句ハ句をもてはやしいふ拵て
門ゟ這入やしいく鶯ひるくゝ外の人
のこゝろ多し
春の野和なくゝ一のこゝや雉子の声　野明
もしあい吉凶や廣野あうてゝ雉子
の声あり　玄来曰うてゝ凶事
合てやうよし　廣化野を唯一のこゝやと
いうんかゝまさくゝんゝ丈卅日度の字
狂いやし　玄の野といいうんう　玄来
心腹す
馬の耳ゝ和めてこゝし梨子花　支考
玄来曰馬の耳ゝ和めてこゝしとい和も
いうん和ゝ和ゝ也

妙なり支考曰何のかたてうのん
音ものめくかしらとり一ぞちよいん
ちうんてて雅さ事なれし論を曲
翠白二子互よえてあるあと弟しと
しるさる示と雅しすこを論とも
よむなり志うれとと邪をいさく
一ぞちゆいしちとんいかとうるなし

去来曰翠示えくれさる故なりん
俗行い雅う沼なる示とやしない
いまくえさる示と学ふ次第よ進
ゑんれのれ終よ沼なる示よなつて
て他の勝れなるとくやはさそ
功とすす事絶なる有なかに
白水の流を立紀義弟ふの邪本導

其角曰ぬい合一つ物の詞あり玄来曰
角いそを又ぬとなるもおかしかぬ
あるべし〜〜こそ氣いきあれ也作あり
うけ花月毛の弱馬物明式　許六
玄来曰予此題句ありさ句有明の花よ来迄
といへて月毛弱芦毛馬とい詞つまれもの文
字を入れて口ゐたまれて駿馬て雅なれ

江梅錆月毛川京毛あと呼ひめうして
首尾せさりしうを後許六曰をうて
石月を嘆すさるよ畠山作まつ作といへい大石と
成山畠作とつちいへい一字とうへ底字の名
あり先師曰白うけたんい古頭千轉
せよとあるしも此事なり
起さゆるまそつとも家の色　杜若

乾鮭と呼〻行やや油法〻　事也

当国の帰てんてきい有うれたか　作者不知

玄来曰伊賀の連歌よあるる風のり是

則先師の一流なり迂化の後まれ〻多〻

かくのゐく〻新なりそを愚ゐるよい及がし

支考曰伊賀の自ハさせること有紀と雖

といやこゝあ〻伊賀ろ連歌い上手なり

当国古よ茶てやや花の事　半銭

玄来曰茶〻ゐやとい〻ハ風流ゐ〻〻

茶りりといひてハ自〻ゐするまし〻てやの

文字千金なり半銭い茶よるるれ者

式部曰といふあり上手のゐ自也〻を

〻〻〻〻〻〻

当流芭蕉とさうゐ自ゐ初書　其角

学問岩乎かりて初学られ　素行

玄来曰角う自て暮春の乱学也初学よ
り之を逆よもる曲かし初の字如何かと
行う自を帰学問楽よ物くに岩かをかるハ
あよ怖れて恥あるくもる海或い俳を拾ふ
時又いたくよりかしまく俳人也ものとを
るさ自ものり凡あを作をるよ先を南情

と知るあをさ也さくさる問を珍物奇言よ
意をういそれて外のあるよりれ魂あくを
本情を考ふこと肯申一角う功者をくく
時よりて過有るよ学ノ初学の人情ま
をんをかるあるあるかくに

桐の木陰風よかを面を吹蔦茶式　凡　兆

其角曰芭蕉先師の櫨の木の等記あり兆曰

たゝ〻に詞はゝきの似るのみにて心大ながうを
玄来曰等級と云ふ所の郷〻同巣の名なり
同巣と云て作せる事の風の地なと高さ数
時雨の降るといふ巣をうりて滝川の上底へ
ふりぬ〻義式と言出ていさゝか手柄なし
さきと見らり生れ給さらんに文信別こ
駒買よ出逢よ野道の芝式　野明

玄来曰駒買よ人出逢よ野道の芝
蔵よや又い来よ芝風情を野明曰蔵
のよりなり玄来曰初りさい浦情を
者子の俳諧の初と達せんと思ふ
〻九只れ〻後きを入作るのみ支考
曰句は秀拙いとかくと世間は情
を志〻〻事いと不審也と咸心

吟寸弓此人を教事年ゆり多て通
せ[illegible]一と世先師[illegible]
[illegible]き[illegible]ゆり[illegible]
日能文[illegible]修行[illegible]
師をたゝあ丈件支考あてゆ[illegible]
金[illegible]して外の[illegible]功と[illegible]
れの月かゝかゝる句も[illegible]ゆり誠よ

手柄をゝ[illegible]唯一平生作意の弱
きを難とす

あゝ山猿うつ栗の穂　小五市

花咲て二日居られぬ[illegible]

正秀曰嵐山を少年の句よしてたゝも
風情ゆり花い[illegible]功の入る[illegible]
か年の句をいひかゝ[illegible]玄来曰[illegible]

ぬしとなるあり代院の收ふ處にして
墓門の大なる傍に處所あり

蘇州の紀安さとの書にあり　載人

真角詩云ことよ云此白いに花せるる
花を得るに別ることとよいへるる書あり
玄素曰期歪要一作の白として花せ
あり後引とあして牧丹處所あり

電の加にまぜて行園に植ゑ　玄素

丈竹支考ともに曰下文字過ぎ曰つ
代と有あり　玄素曰あと知へうたた
雷庭より南土曰玄人わして物しし
論すこ後丈竹を詩りて曰退て思ま
南土い電代自と見ぐるまらん只電の
海代雷庭乃自こ板に行とい中作る

大忰曰さいうりハ白瓜いうり作るん

時多帆ゆるるもの多まつる　先放

そしめハ下を明石深いひり源多集

よ殺め出せり可南曰いうるる殺りよや玄

素曰時多帆壽よ多るやといつまて景

情多まり此うくよ明石深ともとむる

心の移もり多るん可南曰同集り

卯毛う子殺も明石也いうかいり作るも

玄素曰卯毛の句ハ明石といふ称深りり

といふ本意多ん殺句ハ殺句二百三ツ

りかさ移て作ることのよりん

又下意を移せて作るるハ指別し

西られ法ハ名と多かるん紅葉新　玄播

許六曰是を説涯を移といふ感せん去て

ありけりの歌ありまた曰人あり路上にて
人あまたにて上へやゆく車一ときやゆくへしと
問ふ答へて云ふ玄宋曰上
へや行車一といふと上を解ひてとを決
しるるといふてよきもいふに此紅
葉の翁いとふ解ひけりとを孫あ
いうるしかるにみらんからかよふ

こ詩六曰あるかちよ孫あるを沢
を作てよきを何しきあり
歌言葉小姫をのるや大根門　芭蕉
風国曰此句いうるを石を面白さ玄宋曰吾
子いま解ひけるかん只国して志ある
屋しなくいを花を国をるよ奇山遊
谷霊社古寺禁園よろいを国より

らんよきうたよ古事記にのせたるの
ごとく國の初めに成よりかゝる物なれ
ども又國とおしてさまざまの品々あり
ものとらぬあるむ是おい
もとより國のあしきさまにて用のら
きに成ぬれば情の仕なる
國なりい是を畫とおしてをよか

らんさまきいたる根川の僧よ草をむ
蔦の首うらさかゝるんよ鞠壹を小
坊主のちよつとありて宗旨なる家れ國ゝい
古ゝるんや掛物ゝむや家一えゝる
種一國う見何集部を國ゝりと感
動すれい俳諧沈ゝ成といへとも畫を
よくする西師尚是景ゝるあり

夕くれの鐘とかや寺の秋　風国

此句もまた晩涼のさびしかるべきなり

句なり句の意なり風国曰此句山寺の

晩涼をやのよ曽て涼しかるべき俗

玄来曰是殺風景也山寺といひ秋のゆふ

べといひ晩涼といひ寂しき事の頂

上なり志ありてと一端游興驕動閑さ

閑さ部かるべしいふ所一色の秋こ

風国曰此時此情あるいはいうよ情のもも

作もまた也玄来曰若情のあ

るのこころにも作せんとし今の句

ハ無せり句論句もそれをいくとも

な意と先ふ事いのう

應しいへと敵やや書の門　玄来

丈竹曰此句石鼎より流行のたく中
を得り支考曰いうまして新安紀
節をうい入るやを正秀曰只先師の
深意なるを恨るのみ豊章曰句意
をいまた尚時作世人を見たとへて
其角曰志の雪の門也許六曰也佳
句也未十分なり露門曰五文字露

也去来曰人〳〵の評又各々信り
出川此句は先師近化のみをの句也
こゝは門の人〳〵と義〳〵なるべき
まい句作なり此場よりまあらば
御年の石髪や神の光りか　去来
太宰府奉納の句也許六曰髪句より
字二ツ用るい法なり此句切字二ツ

の病有去来日戸曽て切字二ヶ所のみ
なく終あり二ヶ有ことと切字よ
用ひ

白雨や戸板たをる山の中　助童

去来日ひ句初学の工業なから句体
風姿のり語語滑ひ情移るなく
事なくして尚時流行のたく

中也垂上の句あ用ひくい色ある友よ角
ふて所れて句中あ所あり所あ感目
茶をいふとてをれと切所よ為りし
燕暖簾の下てるものを残り此児此下
地ありてよき師よ学ひ所ひくいうを所此
作者よいるむ中一いまを句中よ理
屋なされあり為悪切の出来たるよなん

て、又いうことあり、五理いひよとあり、なん
怖る色〳〵

さ、ら〳〵さや、屋うらんある麻の形、木等
許六曰此句、入麻はあと、吹たくる萩のよ
風といへる等、新也、玄来曰、吹返るの歟、
洞鹿の出よ、帰る気色とい、て、鹿一本
のさ、ら〳〵さをいへる意、格別なり

ゆる新あるる事〳〵

唐奈よりかゝ市ふ新や、夫まつを、洒堂
洒堂曰、路通いへる、唐奈小雪の中、稲ゆも、
事〳〵、費々しなの〳〵、新也、玄来曰、
路通いまゝ、句の、死賓と、ゝ、さる九也
此句、新の、事ふ、貝新ゆ、ある、
う、意みふと、賦〳〵、ある、まて、一句の、賓ゝ

にありそをまもふい庵を奈良樹にて
もこと場よりけるあと用ゐ〳〵そい一自の
花こ宮ふい意祭よて動へゐ〳〵訓ふい
外の自也花こいくつとゆる庵〳〵門
雅あるを撰ひ用ゆるのゝ

靈祭すきあさ花の父意〳〵 耳泉
玄素曰君子出せこあるよ父を喪〳〵ものゝ

耳泉曰玄々年迄葬〳〵作る玄素曰能い
ひ自い他人の自なり君子對〳〵てなし
ゐ〳〵に凡殺生を吟せるゆ意い聖賢
佛神の境ゆと於ふ事〳〵有禁喪法
洞のういさと中事〳〵凡食葉門の
上あとなふへ〳〵自ゆ花ゆてい者と
を出へゐに身外を吟せいゐ〳〵凡害

と求め侍らん

清令海やあるこの事元新鑒尼詩

玄来曰七字新いひくさんかいうゝ

と書さて一句ありかまらん詩曰

ちとりい自他の事〳〵求て作をへうゝ

見いセうをと詩て費句とあら也其角

もさあとと評し侍る

門号や年主めるまて初冬西　作者不知

玄来曰此句表根をうんせて色あるに其角ゝ弱法師の門札の句と等

類と評す予志誤なりといかゝ

似あるまもけハしゝ嫌ひ

深て一句の為体をたゝ門とい

札といふまてやう等類の評を

あせりいと浴まし

猫の鼻ぐすつらに西瓜り那　印七

玄来曰させる事なし　三四分の分

なり正秀曰猫あれいとて鼻を

くすつらしなれとこ西瓜ひ　あ

そ後先師も一興なりと也玄来曰

退てもらはよさいはいまるとを方よを

西瓜めつらしなれい正秀もされなり

心とり猫のあやしとあるとハ風情

なるなせり弓ハ西國まれまを西瓜を

瓜茄子のおとくさてめつらしも

なをいさりなをい芳を心ゆうさりなり

あて人の角と学に我ゝる猫と云ゝ

猫またくく有事　虎の鬱を学

て無ものの人の汗とおもふしるべ
いまる新あり

慢張て人を尋よ山さくら　其角

許六曰是い謎といふ句也玄来曰ここ
ろをもせよいひわけせさる句なり
たとへ人に指指て人を尋よといふ事
指指もてたつねよのなり是いまん中

とゝろせんわれとゝめ人と尋ていく事
を我ゝ心ゝ合忘していふものなり
実句といふことの也むかし南句といふ
ものの切字に咸いてゝを
ものあやをもて実句也此句ハ
あをいつゝに

あさ顔や帯ゝ結ぶ男共　風色

魯所曰此句咸人の長卓也いかゝ玄来曰蕉
句といたゝいまんの杜年曰先師の
第よ我はゝ〳〵男式といふるゝ所よ
秀拙あり や玄来曰先師の句、其角
う蕉うゝ蕉といふるよて他まて巧なる
句の答也句よ事なし答ゝ示り
趣あり風毛句い第ゝ後表裏一句のゝる

へ沈而ゝ所の如句い口を動くは
い出るものゝあり作てゝ
せんゝのゝりと題を出されよ魯所初
露の句を元禄ゝて徳てゝ白さま
陸式又第ゝ元第ゝて家根のゝり
や山昌と十題十句言下よ職ゝ
ゝゝゝゝ句ゝ解ひもゝんゝ一題よ

十句せんといふ畳町別砧の題出す
るよりさ孤式京撰の職とさ面を
孤式といふをそしめ十句事をれらに弔
八葉門主吟重の名なりてしらるの如し
況や集よと出るる先師の句あれば別
のうすありと云ふる事——当時世の作
者義の草葉の句なるらたるこの木槿を

の句俳よまよひあさ〳〵に人を吐出し
蕉芭流と相見るる俳諧——を業ま
ふ〳〵せんあるあるを記すもの〳〵
年号や家中の礼に半月夜　其角
えりや出つるる都とせて　玄来
詩云曰菊元日といふ冠れうしに紙
ゆり玄来曰元日八蒲ふ陶きこ云ふ

やの字平懐よりあらはせし雅なる句
此句元日といふん外なるべし
やの嘆賞
ある詞也許六曰其角此句を吟じ春立
とい(ふ)歳旦よりとりて元日といひ古人
ありと宗匠より先師の曰さくありの集
の今日元日といふんに拘るべしとそ
年月やといはしに近へきまる

やの字嘆賞のやとい(ふ)なり
のやい(ふ)歳ひのやとい(ふ)習俗玄素曰其
角の句よりおもてい(ふ)先師かくのたまふ
へし吊う句なれ(ば)おのてい(ふ)さいのこと海
い集の中にとまりてい(ふ)よいあ
らんに己しう壽あり遠へ向う孚
い孫物新詞とりて常よりまた二句に

意作るとあい先師と論じ給へる
迄つゝ又噴義のやい若国よりかゝ若
国と云ていゝ治定の也治定とは噴
息噴義あり世話とは言ひやすし
乃前切ありや武蔵坊ゝ治定
噴義作りと論じ後賢判迄
風国日吉根の費分一人の事帝と二ツ

入るとせあり難すべきや玄来曰
一分事云二ツ有とを難すべかゝ
云ゝ如む事よりかゝ
許六曰一分より事云二ツ用るとて初恐
あり如事也事中事の通ゝ者
玄来曰一分より事云二ツ用る事ハ功者
初心ゝ云ゝ用ゝ
許六ハ

の事あるかゝる所の習ひとゝなる事の
いやましに初まる事也

玄来

玄来曰此句は十七八年前の句なりしを
先師まゝ賞せられ世上もてはやし
句也玄来事あるゝに感涼
しゝとい〳〵を句位を論ずる初てい

玉市邑蕉翁の誹友中〳〵此場よ
りはるかに以咸連歌師の日花のもと
て此句評ありし沈諾もかゝる感情の句
あまいあなをりかゝとありしを蕉
ら是ゝ〳〵ものを今時の連歌師いはのま
しかゝに思ひ侍る

牽牛花の裏をうゝ世ゝ凡の秋　許六

一説に句先師の高の面てんせりと号
歟ありと許之八曰等歟よりてんせ
りとて詞の指ひまて也趣句かきり玄来
曰等歟といひしと同巣の句なる
べしたとへは和哥にはさくら花常盤
の山号なれの時ともきゝん
とそ紀なせぬ常盤の山の小男鹿

れのなかなりや秋と志らむとよめるを
号歟と申ありんと諸説ありと雖
ひらの事歟

志らるゝや紅葉の神と唱へ　玄来

正秀曰いとよるるこの句はこれの歟也玄
来一生の句層也玄来曰正秀ノ評いまこと
解なと弔ひたる時也とて来る山風の路とな

紅の小袖と呼ぶべきあるべし紅葉ふ咲
おろす山の後しの風と誦めるを
の御詠あるべしと作し作りまてこ
ろ月の御詠にてこたへ
生綿のひちりとと都のも
出さへ行ぬるらん 心助
玄春日の清月 都よのせいるる水のこ

の祝愛と極めて付られ申り面たり
ひちりとてを〇うあらいのよ
はしたらい次の清月まてもよろ
んかるあり句体さある時
おて一句よい〇とあるハ詩
さとのあり
梅の花赤いを〇あらいの邪 惟然

惟然坊ら今の風大うしたふれる類なり義
句まかりに先師迂化の歳の事惟然
坊ら俳諧を導坊ら
の句をりすめて孫深さうり
と浪うちて成い移のまさうと
風のつうりあらいと雲月坊
又俳諧を乱雅にて言別由作す色
とのうこまい示は後いよ風体ら後から
人のうこまおしあるを事をやまよ人家
ら詩よ引句を自の集の奇他よ作る
書ふ雅ふあるうめくの事の句おこま
先師評し後る句雅句あおこいよ
ことの物語ら先師しこ高却せ深こと
あり

ゆかれて見る五湖煎蛸の声を聞　素堂
あき人の小袖をいまや土用ぼし　芭蕉
素堂子の句は深川芭蕉庵に縁りあり
句なり先師の句は尼が妹が身まかりける
に義清の国より縁給ふ句ありけるを
ことにとなむたゞ中に書入れて光須
ゆかの古花集をとゞめるに先師の事をと

書ちらしあるかぎりしるしたる素堂子の句を
有りけり蛸のたゞ中に書入る事をとぞ名
人達人と答らるゝなりとぞとて名
人といふ事をそしらるゝ先師の句
と出張し皆人の知るある事にもので為
らは無信あると人事いふなめ志給たけ
といへり一気感通自然の妙應かなる

事をいふことのとゝまる所しらず詩人の
面前面を説へうるはなしあり

梅白しきのかゝ（筑紫望月）　芭蕉

去来曰古歌集よりは句をあけて先師乃
事成るかちりはは句をうゝてといふて是ハ
歌のあらはを示へすして評せるなり
秋風ハ洛陽の富家より生ずるもの市中
を退き山家に居して詩歌をた
のしむ貧人と愛すべきもの也
ら色実ハ風雅の道遠人を
すべ遠て文作ありしいう有
者人を後ハ作ものを以て先師
の句ハ俗謡ハ句体の句ハ
ものの風あり今や此評をとゝ

[illegible]と[illegible]

[illegible]海[illegible]て[illegible]次[illegible]の[illegible]　[illegible]

[illegible]ことを[illegible]作せり野坂[illegible]あ

[illegible]の文字よ[illegible]む

玄来曰是[illegible]同[illegible]て[illegible]たむ

[illegible]件曰のといひて[illegible]

[illegible]ことといふ[illegible]

修行教

玄来曰蕉門に千歳不易の句一時流行

の句といふ[illegible]是を二[illegible]

[illegible]を[illegible]一[illegible]不易を[illegible]

[illegible]新[illegible]不易[illegible]

[illegible]一句[illegible]千歳不易[illegible]

流行[illegible]の変[illegible]てこの[illegible]

風を今日よりかゝれに今日風習日
用おかゝれゆへ一時流行といへども
こゝをいつよりかり
魯町日俳諧の基といいつゝ玄来日酒
よいかゝしに元吟詠をもとの品あり
歌いをいかりを中よりかり俳諧ハを
一ありを品〳〵をワかちちゝ俗時ハ

俳諧連歌いかくのこゝをのありしれの
りかゝ句ゝる面しをもちゝさる
宗通達俳諧をもちるとして詩やら歌
句ゝ旋頭混本歌やゝ句ゝれぬ事をいへ
ゝをおい俳諧ハ連ひて俳諧連歌と
いかゝをもれ有り俳諧を為て文を
書い俳諧の文ありり歌をよかまて

能諧の歌多り多は行ひ難い諧の人と
唯いとはるゝ事とゝるゝ〳〵古とも吸
ま人は遠てゝとゝるかゝるほゝかゝる事
いたちしゝるゝいとゝ苦〳〵かくとゝあり
器量自慢かゝい能諧連歌の名目と
かゝすれゝゝ氏族地とゝありとゝ乱交と
ありとゝ一家の風とゝゝゝ流風〳〵

魯町曰不昂の句の姿いかゝ玄来曰不
昂の句い能諧の躰ゝ〳〵ていまゝ一ウの
面白多ゝ句ゝ之一時のあ物奇あき多
古今ゝ叶ひたゝ人い
月ゝ物とゝたゝゝゝ紀国屋式　宗鑑
ゝゝいとゝゝゝ花のゝゝ野　山　貞室
秋の風伊勢地墓京行すとし　芭蕉

[illegible]の新也魯所曰月とうちそよふ立
[illegible]とあ物景あり[illegible]や玄朱曰賦比興
い俳諧のそよかすしたる吟詠の自然あり
凡吟よあ[illegible]い[illegible]とのこの此三ツとそなるく
事あり[illegible]あ物景といひしるし[illegible]魯
所曰流行の自いうよ玄朱曰流行の自い
たのよ[illegible]の物物景あり[illegible]もやる也

形容衣裝器物おにいあるまて時[illegible]の
[illegible]なるへい

むまそふふ世春さこ[illegible]れの景

世新久[illegible]流行もも

いのれい物[illegible]へまれの事　松下

海光肥て野疲[illegible]る衣あらはん常新

感ハ[illegible]とこあるひい新玄の何つうひおるい

謡の間とりあつまる物をたしなめるなり
是等も一時の居作しなり作あり今日の座
る人とあり魯所曰むまるなる歩
こしたといふを縁なりなる玄素曰
縁い歌の一事よりて物移りあるた
ものを出ると縁い如なるなり
魯所曰不易流行を元一つあるとい

いうは玄素曰此事弁しかたしなら
ましく人御なくていふ不易を
云為の時流行い坐臥行住屈伸伏
仰の形用しかさるなり一時
の変風是也其姿いはゆかるもいは
云為も有為を云ふ人人の
いうは魯所曰基なる出なる

とゝいうよ玄来曰碁をもてしてハ解
しがたうん先師のうつるかゝるもの
一ツ二ツをあけてあらうりをたゝハ先
師の風といへゝを
一貞固ゝ松けさ門ゝ有世をもさむ
滝ゝ蓮の弟ゝよゝ面といたさ素堂
あれらい詩語ゝ又文字の数合るあを

散乱かたらうめしらの変幽
此句ハ謎ゝ俳諧奇ゝる謎の然と有事ゝ
をゝゝ俳諧歌邪ゝ
魯町曰先師と碁をうゝ出さる風情ゝ玄
来曰奥州行脚の前ハゝ此行脚の間ゝ土
ゝ語ゝゝ
下のゝりゝゝゝ

の二ヶ所と指らるゝより異のそなへに異
流の自分ととなる処行ふことの多し
此年の冬をしめて不易流行の教を
説給へり魯町曰不易流行幸小古説
あや先師の発明あや玄朱曰不易流行
い万事あ渡る也志ゆゑ俳諧の先達小
意といふ人あり長頭丸ゑ来ゑを出る

一新久しく流行し角稽や傾けのまゝ
西のゝ花よりうつけて浮世ゑ天詩
寿といふまて小吟し世の人俳諧
い行の手紙あとのゝ紙あ法あ如き小風
を変ずる事と志流宋周ゑ一変をうり
かゝとまりあを打破り新風を天下に流
行し侍ゑいまゝ此教あし志ゆし

くるおのれと都鄙の宗匠達古風用ひ
一旦流行起せしことを又古風を長
くれのうあとして時々変化の
をゝ〳〵に先師をしめて俳諧の本邪
と見つ事不易の句之又風を時々
変ずる事を知り流行の句変ずる事
をかち教治少懲れとを先師常に曰

宗因ありしい狂歌俳諧今次貞徳は
延を祢ゆる所〳〵宗因い此道中興開
山ありといふを
丈竹曰不易の句と尚時を体とゆるして
をゝ〳〵を先も又流行の句を忘れ也
先師迂化の同正秀曰先ゝ流行を変風ゆゝんを風好を
変風ゆゝんを風好を有〳〵只不易

の人をたのもしまんのこと
玄来曰蕉門は不易流行の説〳〵なり
或ハ今日の一句〳〵のことを云説なり是も
流行もなくしていひかゝるこゝかしとも
不易流行の教といひつゝ俳諧の本旨一
時〳〵の変風との事也
玄来曰俳諧を修行せんと思ふ〳〵むゝ〳〵

ゝ時代〳〵の風宗匠〳〵の考知見すゝ
為〳〵是を知る時と新古おのづからつゝ
とのゆゑ玄来曰流行の修行者ハおのゝ
時々の風の先達の句を一筋に学ぶべ
一句〳〵ゝ不審を記し類を推ス為
に若解〳〵かゝる句ハいかゝ反故の
らんと工夫〳〵或ハ功者に尋ねゝむ

〳〵我り俳諧の上達せるよりくだり
人の句を学ぶるこゝ始より一句〳〵と
いとめかちなる作者の吟味のうち月の
うさをりて絶る功の成る事をこんに先師
曰今俳諧は四句の上支をつゞを席めて
んていい気鋒(サキ)を迅て吐出し心既に落居
為〳〵ばこと也支考曰むかし俳諧

禁禅のごとし今はさいうをいを祖師禅の如
捨着をこれい帰転化
玄来曰先師いはへよ〳〵ばかりよこと玄来
極なし〳〵予示し給ふ句毎〳〵あ
きのこゝろを入るあらばいかゝ又句ハ手強
俳意たしかなる作すへしと俳り凡非よい
一句ゝ月ゝ十七字こ一句をねらをうよわく

[illegible]ばかりに能弱もさとうる和歌の一体なり
自ら志ありの有やうは作るべしとあり岩
作者の気性と口質よりてありのまま
[illegible]る輩は遂てのへきまちれり同門の中ま
をあるは迷ひをとるべし多し
先師曰歳旬は既にすりしとひくと
書るとは上品とした洒堂曰先師曰歳旬は

洒堂曰[illegible]二句ありあつめて作とるあ
るは作とあるをもとめべきやうは作
すべしとあり
先師曰歳旬は[illegible]合まれはあまりを
よくこなしまをとは手とをのしさを
[illegible]といふあり
許六曰歳旬は[illegible]也先師ぞ曰[illegible]

仕よりて事の有を人に志らしめんとて六又云あを
云金を作なる時に有り多く出来ることの也
初め車を思ふ事一功者に及てい云
金の論よりかくして許六曰發句に題
の曲輪を発して作る屋一廓のうちにハ
ものさとの也自然曲輪に門よ有時に天然
あしくて稚なり

玄恭曰發句を曲輪の門よ有ものさとのあ
らに清き昂與感偶する面白き事を
用ふ有然とそ発句寒ふ門ハそ
なくて古人の糟粕事り手軍かけ出て吟
なる時に句賞くのそあるに世一筆記を
の叫る初めのを思ふき而功者に及てハ
又内外の論よりかくして風国弧諧句毎

曲輪内取り此事を示せ[illegible]雷は俳利さけて行かて
[illegible]ことをなりことを俳利とさけて行かて
と真に谷川の落さうや江を利よりと
といふをさうや江を落りたて[illegible]逆
と古て[illegible]ぬ 去来曰他門と蕉門と亦
常に不易逢ひ[illegible]蕉門ハ景
情とよこを貴不を吟す他流ハ心中

よ巧まるこ[illegible]ありたとへハ芭蕉
庵をうををのをさせ門[illegible]元首
の空いきよ出毎武門や二度目の
網よ鉦ありと[illegible]ぬ 禁闕よ芭
蕉ぬ 洛陽よ出毎ぬ鉦ありた
が江東よや皆見細工せ[illegible]ありり
去来曰蕉門の発句ハ一字不通の用中人

十歳以下の小兒も時よりてよき句あり
却て他門の功者しも及ばぬ事なし
他流にて流の功者多く〳〵流の徳
分かるゝかゝることこゝろ玄来曰能
諧い新意を考ふるとゝいへとあのあり様
を遠てゝいふものゝ若き事を
うらやましくとゝふ品なりたゝい感時花

滅涙惜別鳥驚心或を病花ちらんち
苔ばらとてふる里人の来てもとゝふとと
いるたゝひとり感時惜別大こゝろの人さ
ゝ哭笑一首の服なり
玄来曰能諧い火と水よりの流と清浦の
いるゆ遠て二重の潜りい汗をかさりと
いふてとゝるゝかゝるとゝいふ人なりとゝれい

少と水とをかりさしそへたるは心
の清らかなるなるべし事の日汗かくやう
に有と侍いへるさいさをかんに習はせ
ひさしく紅梅とあるを花とたとへられ
たるもの歌也玄来曰句栗あり謡句
より入と又詞道具より入とあり詞
道具より入るは多くは能作多句と

謡句より入るは連吟寄句とされと
常しかるの位と論ずる時は謡句より
入るとよりとは詞をより入る事と
和哥有流ふ婦事とあり能諸ふ
いあるかもだ婦物玄来曰蕉門は同巣同
竈といふ事かり是は能吟の姿形より入て
作とる句也たとへは竿うら長とをのふ

法眼云句力の強ノ深ふかさ有る
或い枝うみしかくて地よりかぬと
吟ずかゆるこ同竈の句ふ白ふ和し
さのとくんとう生れまし[illegible]
玄素曰句ょ句勢といふことあり文ょ文
勢語ょ語勢あるが如したとへぬるふか
ぬ小綿雪ふるると云句を先師曰数
くるまとこ小ぬゆさ潔と作れい句
勢ありとあり玄素曰句ょ姿といふ者
ありたとへい

素ょふ雑子の子を泊ちふ玄素

初ふ此句素ょふ雑子のう張たへて時と作り
ありりを先師曰玄素泊いまるこ句の姿
ちとたや句ゝ素も訓いへい姿ありとて

今の句は五七の五句なり支考の風姿
と云るも是なり風情といひ書るを支
考は風姿風情と云はるを新しるを
さらに安し　去来曰句は語路と
いふものの句をしらるゝ滑かき
とよしとは又言葉の風雅なるを必
優艶なるとをわかち侍らん　溝川は

土泥のおろかやうなる詞あり　あつ
たらいうるとも句巻中一句二句は曲とも
るもあるべし　史記も語路の滑なる歟
なり　先師曰巻頭句を昔より物〳〵
付也　附句は三吉より句を昔也
附物ともつゝとも中には心附と
当るを今は移り言葉にあらはれ侍と

消息とよしとて杜牟曰いかなるを言包
ひ移りいとらまを去年曰支考笑あり
よしとを書出せりそをよとりあり
とゝあかいとかとて今先師の詠
をかけてさとさん化にかれて句を
赤人の名は法師の月殿　史邦
名とさいつる今宵あるべし　去来

先師曰うつゝにひ句実は去年
二年特とうけゝれとあるゝありと猛
迫り実を思ひ句を拾ひ
いとかとつかうよ句作のあやまりてのる
と言ゝ此の境あれは冷暖自解あり
てゝは悟ゝ明ゝむる事なり此句
も赤人の名を面白やとのゝ名

物語をしるしかりそめとなりぬるを
とゝのへられあるとゝ合点なるも
とはおもうつり行所味はひんなる色し
雲かゝりていひぐくらおもしたゝへい
られ椒の浪かゝるけしきなるき
身ほとれたる力のとゝまるとゝろ
先師翁をうして都にとゝまりて右のゆゑあて

太器をもつけたるゆゑ太力ゆゑとりかくる
ゆゑを仕りとして語て侍らるる一句より
鏡のかゝる事なれば言語よりしかゆ
きとゝまり着破せるゆゑ
杜年日句の侘しといふる事なれば玄果
日前句の侘を知る消る事なりたゝへ
よき句のゆゑを侍よ為せされいのゝ

先師の意の句をいかゞ
上京の千家ことぶとうなのを
馬より出ぬりの小関て立さる
前句を人の妻もいかゝ武蔵野人は
下ぬもいかゝ宮同の下ぬすりと
入て作と宮めるるもの也
細き目よ若なる人の頬もれて

あるを称ずなる神の粉ちかひ
前句古代の人のいかゝ自ずり
白粉をぬまとを花ぶ新
役者まゝの神の面ぶとの
前句の夏今ゆゝのあとえの
尼ぬるへを雪のきぬ〳〵
月新礼礼ゆんを〳〵て

前句いうまとて紙衣土の毒しるし西
[illegible]
無疑よしのゝ[illegible]を持せあや
前句所家のゝ[illegible]なをいふ[illegible]きりそと
もて他ゝ[illegible]ゝて[illegible]
杖年白面新[illegible]
来日ゝ[illegible]

物[illegible]面新ゝ[illegible]の事也昔[illegible]
いつゝ事と[illegible]
[illegible]

草庵[illegible]
いのちゝ[illegible]撰集の[illegible]
初ゝ和哥の[illegible]
先師曰前句西行[illegible]

ゑよりさきとて五つ面白と附られたる
らあんたく面新しとて所望しとて
かく五つ目白面白雅因の面新
らんとあり又人を定ていふのをもあらはた
とへか

癸巳の初夏お雪ら詩廉山
因義の所ゝ詩人を誰と

先師曰此ゝ句とかけあるゝ人と而新
しと支考も書到りあり又今を爲一
支考曰附句は一句を一句なり第句附な
ともいふを有一連俳よりてを
主傳を人を時名句第長又合有て
一句を多くいあるを者也
玄来曰附句は一句千一万也故よ能諧

変化極まりし　支考云一句出一句と云へ
附る情の事有る句しも附る情ハ多くなれ
ども也句ハ一情の内ゆゑといへども有句し
先師曰氣色といふ詞つゝまるよし　天
象地形人事草木鳥獸の物を云
を形容する氣色也
支考曰附句ハ附る物今俳諧つゝ
きうゝとよりしてゝ奇句　先師の句一
句もつゝきうゝ有し
玄蕃曰附句ハ附たるハ附句よりハ
附るゝ病あり　今俳諧附事を
初心の業の極めなるとつて附る句
多し　実人を又附得たと人のいふも
事を取て附る句第一やうゝ長

[illegible]
玄素曰附而又附而附[illegible]
[illegible]附あるとなれ
情と知る[illegible]附んあい第句のうつり包
言あくしてい[illegible]きの義よりて附ん
[illegible]
玄素曰蓋門の附句い第句情と引ある

[illegible]
人[illegible]
[illegible]
先師曰附而附[illegible]
[illegible]
宇鹿曰先師十七の附かゝ路通より
授し[illegible]
玄素曰[illegible]境の門人

那よりつて附句と書出し給へん
と侍りしに七世孫の附句ありと
ありと人の選び為んとそ侍りし
を書出し給へ今十七条中に
世と侍りと云なりと云に大体よ
てのことを申しあれの路通とし
拾ひとりて人々教ゆ許六曰此事

を那ひ為るか千那は法師也
玄恭曰附句は何事あくさ〳〵と字
句をよむに思ひ寄て
附句を申むい苦しき事也
玄恭曰風は千変万化そ〳〵とと句弾
新〳〵清〳〵軽〳〵性あり〳〵正〳〵有り〳〵
因る和する剛る解る為川の〳〵

速なるかくのごとくいよいよ鈍くして濁れる弱く
重く落ちゝ去りゝ濃なる味ありて駱駝くく
古代かくのごとき悪しく似て堅さと鈍
なる句のいまだあらざる
支考曰附句は句より新古あり古あり附る場と
新古あり玄素曰古風の句を用るにも場
よりて宜しきあり古風のごとく
いくく古新のうちにかくあり有る
先師曰一巻表裏あり名残と二巻あり
いとゝうゝうゝ有る
西鶴云事を作る色 玄素曰一巻
名残の表裏を物語を面白有べし 初折裏
半ばり名残の裏をかさねてかさねて
常体にもやはり作るべし 本は新たに

互に退屈いてきあらあれば句のうんと
きれい部ら句ふ好きとて出来ざるなりさ
きし来〳〵まて吟席いさみありて
好き句出来りし を定に止るかあす
好句成男て重うしとい筆面
其角日一巻に我句九句十句を
とし一二句好句あらあれば句成

せんと称し句あらば却ら出来ざる
ものもいまく体句あらむ路ら
好句と男て重しと
玄蕃曰俳諧あ出て俳諧常時婦人俗
てあるを見合一巻に一句二句好句
あらんに風流なる句し浪化曰
今は俳諧あ語号を用ふ事いう〳〵

玄東曰同〻〻に一巻りの二日のうちまゐし
猿の義の中より侍人いり〻〻小清門の建
も門守の義あり此集撰時為かうホ
の句ちくあるとして稀法の句と作
して入給て玄東曰凡吟ずる時
其風有風に必変化の事也
先師ことよくこれを一風よ長く

うつ〻ゆるまし化事と示し給へ
なり〻先師の風あり〻と一風よなつん
て変化と云〻さるに却て先師のんよ
なり〻て杜牛曰蕉翁句の宮ぶいうよ去
東曰蕉翁句に人の志と感ずるうよ
さとあり〻しと云ふ事也さるな
へきもせし云ふ又事欲こさいなりと云ふ

下ゆすり杜牛曰叢句附句の境ハいうま
玄圭曰七情百景ゆゑ景ゆゑ叢句附
句常也たとへハ宮の柳ゆゑ月ゆゑ情と
いふハ叢句ゆゑ[illegible]ハ[illegible]と逆て
常といふハ叢句あり杜牛曰心ゆゑ[illegible]
ハ皆叢句あるへきや玄圭曰此うち叢句
ゆゑあるとあらぬとハ句ゆゑたとへハ

つき出ゆゑ樋の流れの雲ゆゑ
此句を先師の古池の蛙と同しゆゑ
なりとなん事ゆゑ[illegible]
きとゆゑとなり興もあるむさぶれと
叢句あハ[illegible]
野明曰句の位ハいとうあるあるや事
曰ちれも又一句をあ

卯の花のたえ間たえぬ園門

先師曰句の位尋常なるはとあり素

曰平生句位是格言さにあり句中より理

屈をいひ感いあり今句は費句は位

くゝかゝることの也此句を言かる位の句をい言かる

一師明日句意より細なるといふるこのよ

や去年曰言ひとり哀あるは何ゝ位細をハ

たゝかひあれ句まなかるゝ句をハ句の意ひの句の

あはれ句より細をハ句のあるゝ位ゝ句なり是

も陰句とかゝ者ていふ

十番のもと小松ゝ秋風

先師曰此句言ひとり有

句ともも意入てあるか句言の位

先師曰此句細ゝ有と評ゝ位べゝと也

玄素曰来りてさ記俗紙を志とりの事を
以心伝心なれば唯先師の評を何けて散
らのを他ふれして明むる屋
先師近化の年深川を出て伊勢坂留
を、いかいやうり今の必く作り伝らんや
先師日ちくちく今風あるを至て又
七年ちる迄伝ちく一変のらんとあり

今年素堂子浴の人伝て白蕉翁の
遺風天下に満て洒落子屋敷に
ひれ日吾子に伝ちを問ふ
神と吟合ふて下の新風を興れ
と申り玄素答て云先師の言かし
事あり板に伝れ弔もかるそは只人なれ
ものと伝ちに事ち先生をらしろ

二三の新風を起さんとおもふ
度天下の人をおどろかせん事あるべしと
世波花の波のうつりかはるに合
風雅は楚辺まいりて師あるべし只
此物語の作者の心中素堂子
は先師の古文よりて情質賢者人
なりしかば世は能若き頃迄

うちたてさせ給ひしいとをかしき風
流を世出さまし事のとしをかも
さ事なりて

安永三甲午歳尾張帰敬菴雨巷嘘居士

一言の書あるべしの去来抄と上梓以前の
稿舎遺稿と引合セ見るべしかるとも

古實の篇とのせ原をかゝ[illegible]の事
[illegible]ゝ[illegible]て文政甲
申歳下毛月丘秘書入
於尾州一音の書る玄来坊の叙跋なり

玄来坊叙

芭蕉の翁の[illegible]の道を[illegible]

能諧の真心

風雅とゝも曲るとゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]風の[illegible]
一流八湍[illegible]支流湾[illegible]
川水[illegible]
[illegible]の[illegible]中出るの時風調をしめて
泥出ゝ[illegible]意を[illegible]
を打ゝ[illegible]ゝ今時平地

波濤を凌ぎ蓬萊を撫でんかをいとゝ
[illegible]玄来らの如き此物浮くて
漁て呑舟の魚をとらんとす事なれ
ども

安永三甲午十月　　曉臺

玄來拆跋

崑岡之璞非人採之則誰知璞之
爲玉乎一日　先生年二三子游
焉得諸幽蘭之下琢而磨之皓々
乎世所謂玉鏡也使對之者心有
塵埃之外則玄來之功至是可
謂發遷千歳矣吾徒愉快其

在於新

井土朗

一高書自去年抑ハ
安永四年乙未三月於白王都出版
井筒屋庄兵衛

[illegible]

[illegible]

一同京　等級[illegible]

[illegible]

[illegible]

風の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一等類[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

枝を短くして地にさしぬるを作ると云ハ
これらハ同じことなるへし
一 発句の脇
発句を請けてちと揃にくし 世間ニ
是のつりや友が脇を作る人
此の語ありし外の事也無のやうに見しの様
世間悉の句ハ文字にありて脇句案ハ浅くなる
知るへし
一 脇に付る句の仕様の事
打添　相対　打違　比留し
これは上ハ打添と申ハ一句の心ハ合点ゆく幸にて

先ニ句細雑に候ハ両句ハの句の上下に而ニ
其の句ニよりて判の知らるれハ意味よく聞すへし
いかにも語を定めぬし前句に付も句も以謂
一 其て両方の句を以て八続様墓詞等に
日を云ふを其の在る春に悉
其の事の見し文字をとつて題を留ると類
書を以て句の上の詠あり是と年句にあるハ
日を云ひけれと其の其のうへ
其句の場ハ式めて粒てにも同し文字見えたり
同し一し又其事にも留るへし

一 卜吟ゝ錦の木の葉ふるへまする　こそ候
古今集ニまれなる詠ども見ゆるとし
つたへしかれハ錦や葉ハ何ニ候ぞ思ふ
かくハ寄りて候
らん哉
木の葉ちるまゝ風の一卜吟と云出る也
秋の句ハ出来たるを古稀と申されき
一 事ニハ発句ハ何ニ候平句ハ何ニ候九ツの体とし
七ツの体とし申しても体を発句ニ而て
にて又ハ何又いふ人ハ何とも申せとの
事ニ候とて何様ニ候とも候との様

一 蕉集ニ有リ
役行の秋ニ而ゝ門越て　老非
二書の事ハ字見ニ候稽に出て　云立
秋句ゝ取ハし候日付　申候
皆て也外ニ様候門越えて秋ゝかゝりて
文中にて記し文稽古出てゝ見ゝ二百廿と
日付し取ハし候秋句の心付ニ
て文章の趣と成て一句と見る中ハ伝へるゆへ
自然とその様へ移りて何ニ候平句ニ候
小船ニ候枝流しし　月出て

古人の評あしく源しくのしるさつてしてやうに
ふうしと行りよく老人し望し勝ちしてく
名誉しては思ひ白法しあり誹たいしとして手練
なとはふしの注にて前を三し額人のらちいへ
やうさふなる一トしるは三句目やまゆ文字に向くまて
一句附にてしての付候ことなしあり
久目顔さしてやかり様の秋更て
これは久目顔秋更としてつく脇と云るや
うり候のしちうよくることなり此勢有物する三ヶの
るの追ては脇挨一ト句
一 脇なの名月をまうくわり七名しかハ八勝く

いへ発句しいへ宮句と又是りしと云三法と云外に
起情 起承 移ま三脇を以一順へ従ひ一巻
逆く是第五の名月をするものなりくは在
にかするによりは執中の法なり此執中といふ
定りして句々も白出すに向てすなるといふは観をと
いふ新しく起るて並へ句なり出此宮又は宮之勝手て
宮とや破題の三句目なうし三定りますいかにかりくと
将来りと云るのとこといと第八宮との内とよく
様し勝るといふさし会い変化させんとして
巻のうへ人倫への情を移りし続く一ト変化

さればこそとおもひし千種様は急ぎこ集り
宮がたはこよひちかくきこしめさで
うちなかめ日もいたくくれかかりて
然れどもつぶさに語るもいかん
手紙なる紀の字ありかくなるを
語りて所にて思ひをいたし
姉こなの月を眺くまでさればこそ
彼の妹婦に向ひ念仏
ありしかたはらに居れば思しなし
秘名はきこえてのたまふのあはれ
情まねでいとの魂の時を待

其様らの集の中より千種様も
大江の本ふ本ば情けをも語りけれ
是無意を紀にくらべて去がこの居
追ふてもやき夜の口にまち
てうちかたのあはれ
ふくしとの声にして追返花さんとて（夜月）
一下の命てる
えそしし萩の花はこぼれて
月も稲葉の上にいるしぞよきさる
首をられて萩をこふ者しも出り稲葉に露さる
月もいろどる山をも出でてとよみける

一下のるり色

一はく色

一下のるり色

一下のるり色

一下のるり色

一下のるり色

一青切

[illegible]

一冠[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一袴[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

一三ツの[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かゝりしより古哲を慕ふ輩も少からす其の仕ふる事も
猶又その事とも委しく記し置んとて年々に
速やかに口授口伝をもてまたは猶諸氏も記し諸古の
採録ありて両家流儀のことを記し行へ給ひて
今家々諸流儀の中より私なる所のことを小冊となして
其うち三師よりたまはりける口授と比せ小冊となして
これを後年の秘事とし他見他言をゆるさす
猶さて由来を尋ぬるに他の門人に請れて伝ふ
ことなかれ

言置く

此書はゆゑありて房州よりしるし置く
ものとも記しをき無二の和歌修行し
後によく是をよくまもりて古翁の授人とし
うけつくへきもの也

天保十亥年正月

画 松